第５学年総合学習実践事例
「心でつながろう！　～これからの日本と中国～」

１　子どもの学びの実際

本単元は、日本と中国の関係について考える学習である。両国の立場から関係を捉え、関係についての自分の考えが構築できるよう、仲間と共に繰り返し意見を交流することのできる単元構成とした。そのために、以下のような支援を行った。

ア　両国のつながりが分かる新聞記事や他の方法で収集した情報をもとに考えたことを仲間と交流する活動を仕組むことで、両国の協調について考えをもつことができるようにする。

イ　中国からの留学生と両国間の諸問題について交流する場を設定する。そうすることで、中国の人の日本に対する思いを知り、両国の関係を考えていくきっかけになるようにする。

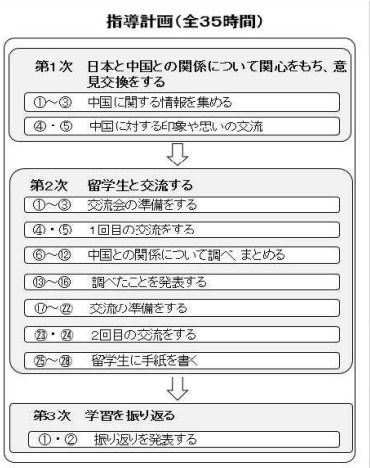
ウ　諸問題の要因を、日本の立場と中国の立場で板書上に分類し、まとめる。そうすることで、諸問題に対する見方が立場によって違うことに気付くことができるようにする。

エ　単元をとおして、「中国に対する思い」を観点に振り返る場を設定し、変容した考えを取り上げる。そうすることで、中国に対する新たな見方を見出すことができるようにする。

※波線は思考力が発揮された子どもの意識、下線は前述の支援との対応を表す

①　日本と中国とのこれからの関係について考えよう［第１次の学び］

第１次では、中国に対する印象を伝え合った。両国の関係が分かる新聞記事を収集するよう促し、収集した情報をもとに、考えたことを交流する活動を仕組んだ。**【支援ア】**その中で、子どもたちは領土・領海についての問題や経済的なつながりがあることに気付いていった。その時のやりとりの一部を示す。



Ｔ児　新聞の情報を見ると、中国は日本との問題や他の国との問題をたくさん抱えていることが分かるね。

Ｋ児　その問題の中でも、日本との問題はたくさんあるよ。なんだかあまりいい気分にはならないね。

Ｏ児　日本と中国はうまく関係を築いていくのは難しいと思うよ。どちらの国も、歩み寄ろうとしても結局何か問題が起こっているから、これからも仲の良い関係にはならないと思うよ。

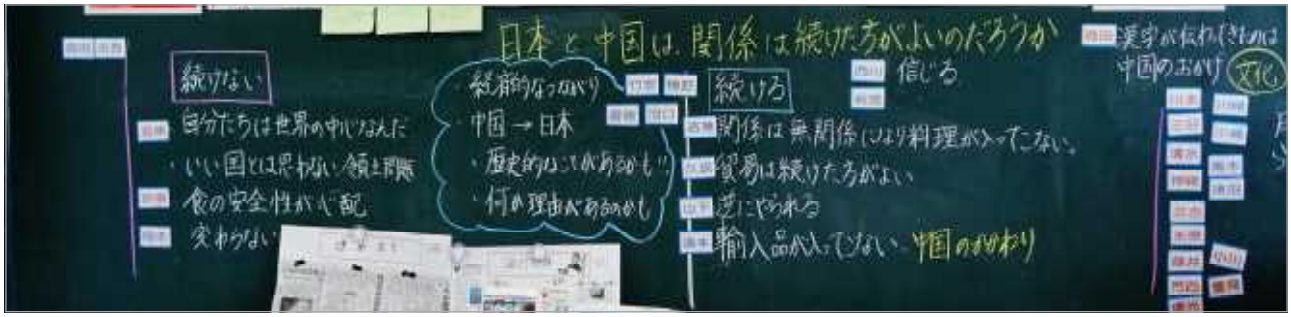
Ｙ児　ぼくは、どちらの国も仲良くしていくべきだと思うよ。日本は中国と仲良くしていかないと、周りにあるたくさんの中国製の物がなくなってしまって、日本が困ることになりそうだから。

Ｏ児の「関係を築いていくのは難しい」という意見に対して、Ｙ児が日本と中国の経済的なつながりから、「どちらの国も仲良くしていくべきだ」という意見をもった。どちらの意見も根拠や理由を示しながら意見を述べていることが分かる。このように、子どもたちは、新聞記事からの情報をもとに考えたことを交流することで、これからの日本と中国の関係について、考え始めたのである。

次の時間、子どもたちは、様々な問題や経済的なつながりについての情報を根拠に、日本と中国とのこれからの関係について自分の考えを述べていった。その際、中国との関係を「続けない方がよい」と「続けるべきである」という２つの意見に板書上で分類しまとめていった。**【支援ウ】**そうすることで、子どもたちは、両国の立場から関係を考えることができた。

以下に、その話し合いの一部を示す。

O児	領土問題から考えると、日本は中国との関係を続けない方がいいと思ったよ。日本も中国も互いの領土に侵入している、していないなどの問題がこれからも起こりそうだよ。
K児	でも日本の今の文化があるのは、中国からの文化があったからこそだと思うよ。昔は、中国と仲良くしていて文化の交流があったのだから、これからも仲良くして関係を続けていくべきだと思うよ。
T児	ぼくはどちらとも言えないな。今のぼくたちの生活を支えているのは中国の製品だし、日本もたくさんの製品を中国に輸出していると新聞記事にあったよ。だから、関係を続けていくしかないのだと思うよ。
M児	どの意見も納得できるから答えが見つからないよ。どうしたらいいのかな。



これからの日本と中国の関係についての話し合いの板書

O児の「続けない方がよい」という意見と、K児の「仲良くしながら関係を続けていくべきだ」という意見を受け、T児は「どちらとも言えない」と述べている。このT児の発言から、O児とK児の意見を自分の意見と比較して結論を述べ、さらに、根拠や理由を示しながら論理的に思考していることが分かる。この後、どうしたら中国との関係について、答えが導き出せるのかを子どもたちが考え始めたことを見取ったので、「どうしたら、これからの日本と中国の関係について答えが見つかるかな」と問いかけた。すると子どもたちから、「中国の人にも話を聞いてみたら、何かヒントが見つかるかもしれない」という声が聞かれた。このようにして、子どもたちは課題解決の方向性を見出していったのである。

②　留学生と交流すると見方が変わってきたよ［第２次の学び］

中国からの留学生との交流

前時の子どもの発言を受け、中国からの留学生にインタビューをする場を設定した。**【支援イ】**子どもたちは、「日本での生活」「日本の文化」「中国の人から見た日本」などについての質問をし、留学生は子どもたちの質問に答えてくれた。子どもたちは留学生の謝さんから、「互いの国が相手の国のことを嫌いなどと話すのはとても悲しいことです。なぜなら私たちは、日本の文化や人が好きだからです。日本人と中国人にできることは、相手の国のよさを知って、それを自分の国で広めていくことです。それが日中友好の第一歩なのではないでしょうか」と、聞いた。次時に、留学生との交流を振り返り、中国に対する思いを語り合う場を設定した。**【支援エ】**その一部を以下に示す。

Ａ児　留学生は日本のいいところをたくさん知っていて、うれしかったな。もっと中国のよさに目を向けていくと、よい関係を続けていけると思ったよ。
教師　Ｏ君も、中国のよさに目を向けているよ。Ｏ君の意見を聞かせてください。**【支援エ】**
Ｏ児　はい、初めは、領土の問題や領海の問題、両国の産業に関する問題などから、中国とは関係を続けない方がいいと思っていたけれど、これからは協力していけるような気がするな。中国に対する印象が変わったよ。だから関係は続けていくべきだと思うよ。
Ｎ児　私も印象が変わったよ。国と国は問題があるけれど、人同士は理解し合えると思うな。
Ｓ児　留学生はとてもやさしくて、よくない印象をもっているのは日本だけなのではないかと思ったよ。
Ａ児　謝さんが日本のよいところを見つけてくれたみたいに、今度はぼくたちも中国のよさを調べたいな。

留学生との交流の場の設定により、Ａ児のように「よさに目を向ける」という新たな見方で両国の関係を考え始める子どもの姿が見られた。そこで、新たな見方で考えているＯ児を前時の振り返りから見取っていたので、ここでＯ児に発言を促した。**【支援エ】**するとＯ児は、学習前にもっていた中国に対する思いと、交流後にもった思いとを比較しながら、自分の考えの変容に気付き、新たな見方で両国の関係について語った。子どもの変容を見取り、取り上げることで、周りの子どもたちも、両国の関係について新たな見方で考え始めたのである。

その後、中国のよさを本や新聞、インターネットで調べてまとめた子どもたちは、留学生に見てもらいたいという思いをもち、２回目の交流をすることになった。交流会の内容を話し合い、自分たちが調べたことを伝える時間と、もっと友好を深めるために遊ぶ時間とを設けることになった。２回目の交流会では、調べたことを伝えたり、ゲームをとおして留学生と接したりして、自分から留学生との距離を縮めようとする子どもたちの姿が見られた。

２回目の交流を振り返る子どもたち

次の時間、２回目の交流を振り返り、「中国に対する思い」を交流する場を設定した。その際、変容した思いをもっている３人の子どもたちに意図的指名をした。**【支援エ】**以下に、子どもたちの振り返りの一部を示す。

○　初めは中国のことをあまりよく思っていませんでした。それはニュースや新聞でよい印象の情報が少なかったからだと分かりました。交流会をして、中国の人は日本が好きだと分かったし、家で中国のいいところをたくさん見つけられたので、日中友好に少し近づけた気がします。（Ｓ児）
○　中国のことを調べたり、留学生と交流したりして、中国との関係の中でうまくいかないことはあるけれど、中国の人は悪くないとわかりました。だから、中国との関係の中で、全てが悪いわけではないと思いました。（Ｈ児）
○　調べたり交流したりしているうちに中国のことをもっと知れたし、中国はいい国だなと思うようになりました。李さん、謝さん、龍さんと交流をして中国にはやさしい人もいるし、中国には中国なりに今の問題には理由があることも分かりました。（Ｍ児）

Ｓ児とＨ児は調べ学習や交流会をとおして、中国の人や文化に対するよさに気付いた。Ｍ児は、学習をとおして、現在の問題の根拠を明らかにして、考えを構築した。Ｓ児、Ｈ児、Ｍ児ともに、調べ学習や留学生との交流を振り返り、中国に対して新たな見方で考え、自分の考えを構築していくことができたのである。

２　実践を振り返って

子どもたちは、仲間と協同的に課題設定したり、整理・分析したりしてきた。仲間同士で考えたことや新たに分かったことを交流する活動を仕組むことで、自分と仲間との考えを比較しながら、自分の考えを明確にし、対象に対する新たな見方に気づいていった。また、振り返りの中で自分の過去の考えと現在の考えとを比較するよう促すことで、自己の変容に気付くことができた。しかし、自己の変容を自分の生活とつなげて考える視点をもち、学習を振り返るよう促すことで、より自己の生き方を吟味できたのではないかと考える。今後は、子どもたちが気付いた新たな見方や自己の変容を丁寧に見取り、それらに対し、どの場面で、どう問いかけると、より自己の生き方を吟味できるかを考え、研究を重ねていきたい。